

911.3

工

坤

續之體

坤

粗朶草さけりこく味あ來大原の宋琴  
庭中音ノノ琴の聲かと毛トモト  
左也、右也は豈づれ木魚の様のう  
ひをかもへ合せ士朝の枇杷花宿  
さをか味して造紙紙と毛子の醸  
下尾上戸樂引歌元月すえの庭



集を完へ猿の面をかぶて醉を尾  
しに尾ぬけは赤きと笑ひ玄子と  
尾張の蓬丸がおれ我身じり浦の水の祭  
や得たる心もぢやむ梅が此にて島  
と名ふる手越五十四郡のゆめ真さう  
今より余山口はあら様の助毛  
くそ紫竹のゆだれ不器用じと

予がよみがえをねる序皆そぞりとも  
今や老いたいじめの粗とぬづ辭を  
せきゆらはれにらはんはき様考  
あはまの序考すお難ぢゆくと二岐  
平政元じきともわの年庚申月日を  
考す一おぢやれ其耳言が紫  
鳴呼

文化癸酉二月

木六樊丈

巢居

四

續醴集卷之三

秋之部

夏至日すよもや、芒ト  
月のち度せ山の井を汲  
泉は甲秋とすく、秋風を覺  
ころりとせす。  
大扇の秋明れ梅の花

まの魚りれどもかう  
身たよほめうだ。歴翁の故  
里の首塗のあ風呂。  
宿主もお野の都すあやうや  
桜のむらはあう御りえ  
ほうり代えうよ御りえ  
ゆうかうせぬ思へんね  
あれ桜よりのきくはの風の前

くやし笛よ蟬の音  
つ由をたね浦の里をきて岸  
川、あゝとて浪よ行運す  
花よ生よとくあせす生よう  
雜へいつよの旭峰ゆん  
鳥城賣の声よとくぬゑる  
煙ねのゆと立がくとて若  
鳴づれ森向のちりばゆのん

ね秋・ね秋ね秋ね

今朝の風はすこぶる  
涼しくて秋の如きに似  
たる感じがする。朝日  
のあひす葉色の如きけ  
旅人の心を之より離さ  
ない所の如きあるが如き  
かし難いものである。

佛の名前をかきぬき  
年少の人の筆ではある  
が何せかといふと佛事縁起  
書の中の如きを書くには  
才をもつてゐる筆者では  
あるが、筆の運びが少し  
怪しげなものがある。

梅谷

簾ゑやうすとあ丈の風  
我やれりまくらまくらの日  
ころくせ麺の煙まゆ煙  
店屋の簾れりすと垣  
たぐくせハ柳の匂いとれぢ  
まくくさくらの雀子の声  
あくつよよとあわしア鼓

蓬松 松谷 松谷 松谷

すれもう少しすらみの  
常よりかひの雲比元氣を  
汽艤、簾をまかざる  
室ふよ娘とつとせせられ  
ワルの酒ハ蠶むかじ  
常のよよくの月の月  
いつまの士。笛吹てあす  
経時と年冬の想仰りとも

松谷 松谷 松谷 松谷

地獄の如きを今朝の宿不  
喫花の一宵田をわざうる  
るよつまちに之をよしむ

松谷

秋のる菴の葉と飄か  
處より、うやの持よ广金  
やまと小舟の席や集すむ

晋義

浦人

やすともおぢぢ  
若冲の一に代ねて日明り  
牧の帰らひる聲  
響き乍れを一記  
入は思事空くすれ  
一時よほとひとめ史ひ  
あすてり物あせんてゆ  
者六の四首のすくられ  
二松

交義

すゑのつる日とまへ往て身

伝丸

二日月と二度を度て通

來ち

義の後よハ小辻居かず

三枝

野よ高め度む里も御さう

史方

中の所あめくづりか止

可う

初夜と今夜占祖父さく座

涼や

きくやうけさん春の絵書

希れ

未免の身ぢりたす画つき

三枝

羽衣かうふらの温泉

晋義

蓋のちれ小雨のゆる況う

佐丸

うこよナケテ身のかき拂

山人

誰よ身をみまんせうひ

田人

身のよもじいハ身まもとせん

二松

身のよもじいハ身まもとせん

涼や

たよよおよ身のゆき

一叢

見ゆれ矣あらの西ふる

交義

清よよしふる白象のまは  
今宵身のまゝひか人をめに  
晒田の麻れあと若すす  
かづくやまくせうてお階  
鯉の鱗とつくる門先  
象はけ雲へむらくせぢぢ  
眼もむくれぬ花の匂いや  
ゆうきハ春の住みのむすせ  
有タ  
浦人  
呑珠  
和陰

旅の宿子蝶のまよひ

史方

清光小弟てせぢすに  
か人の深もええとく

名月の秋も房やく煙々那

白石乙二

ほ金やあよがたりまふの庵

喜年

肥前  
久風



伊勢

椿堂

こよのりうけてまよ秋をも  
朝日の昇るゝを虎毛可取  
雞の捨ゆたりとも前 戸浦  
野放れさる無狀す壁のあ 夜六  
雁二むし一群ハ常くゆづら 附川 旨岡  
ソリや日とてわよちも老 廣陵  
きの秋うかる猶すかます  
御了了もや山かのねぢる 既醉  
巾両

葉の元月の脅の見えり 吞馬  
せはけかみたかすむ夕齋 古川  
近火や底へ煙す柳の葉 三籠  
御舟、よし岸すよ而神 今泉 五嶺  
初厂の身すれりすすりのす 蓬松  
秋もぬき下のひのす 仙支  
木、秋いたをよじまと外も尼 白石 竹湖  
あまくすくるすく降る秋の暮 岑朋

松滿會  
金成來三  
廣常時也  
湛北  
雪兔  
常陸  
金泉  
婦指  
林伯  
立桂  
意竹  
人祖亮  
山風  
王扇  
李淮  
音流  
夕照  
音鶯  
音鶯  
雨月  
竹有  
真山  
月川  
青標

おみの山もれい秋の入日可れ

筆了

むすやむかしたうすは  
文卿

タシテ旅す狹道りを  
草ね

あはせやかなよむかくとまの花  
金五見

花艺よきやつたるすみの  
モミ

ササノレけれりもみの  
葛井

タ原の吹のき風とほれり  
吉坂

り月の尾季よどりあわせ  
水沢

水二

淇水

以風とせよ近ひ蘆花と成れ  
一葉 鳥淵

壺花わゆのもうとやまの風  
一葉、壺花

えむすくじくじく峰う宣北原  
吉岡

宿山の松や周子押す君の歌  
古川 嵐竹

空す夜の遠弓もかんと秋の月  
東堂

かくわくせや歌の頃比か  
岩瀬

りがとく歌にせうゆの歌  
大原 有揚

今よかうてせうゆ、をく月夜  
信法

誰、酒之味のあひの小坂  
北渓  
穀繁  
人、月日宣の月  
卓池  
波後  
李頤  
薄持や道省のあひの里  
曉里  
宿の旅名のりかくに  
南壺  
苍山人、寺中寺都中  
東鱗  
有仰の新之寺  
南壺

夕月と秋の月  
五粒  
松路  
寺古峰  
麻生や人里生々人の家  
輔  
着都  
雅集林林の木  
指之  
鹿笛や神の小川の音  
金成巨洋  
秋の風  
桃英  
山桜可奈子の秋の風  
翠卿



瑞錦の爲めに此の御歌  
其化  
木山里と日月人の外  
木陽  
この雨舞の抽絲傳流  
東甫  
花艺海の月、丁度かく  
孟谷  
家事多忙の事は心の静  
文桂  
床心を椎の床、其持物も和樂  
和樂  
お詫びの事は其の事  
志明  
都事の相切が大抵ある事  
守端

湖の水を引く事は力なり  
宇澤  
湖の水を引く事は力なり  
近江  
金泉  
小麦二  
古  
金城  
寸義  
白  
紫  
星辰  
山  
餘麻瀬や難の事は其の事  
星辰  
景の日付事は難事より始  
伯公  
近江  
五孝

以 が や 雜 か せ 大 亂 常  
晋 蔡  
芒 熊 眉  
曾 北 楚  
儲 史 楚  
可 成 楚  
乃 卷 楚  
守 村 楚  
秋 用 や 大 の 事 し 故 事  
柯 有 楚  
廉 修 も 戰 以 之 用 楚  
魯 卿 中  
大 之 の 事 と 論 也 事 事 事  
東 宋 日 吞  
秋 の 人 の 事 い は 事 事  
居 ト 月 月 月 月 月 月  
東 壯 ト 月 月 月 月 月 月  
柿 部 本  
立 富

以 が や 雜 か せ 大 亂 常  
晋 蔡  
芒 熊 眉  
曾 北 楚  
儲 史 楚  
可 成 楚  
乃 卷 楚  
守 村 楚  
秋 用 や 大 の 事 し 故 事  
柯 有 楚  
廉 修 も 戰 以 之 用 楚  
魯 卿 中  
大 之 の 事 と 論 也 事 事 事  
東 宋 日 吞  
秋 の 人 の 事 い は 事 事  
居 ト 月 月 月 月 月 月  
東 壯 ト 月 月 月 月 月 月  
柿 部 本  
立 富



朝霧やほくよすのわふく

仙翁

湖雲

月をの写とるのきうりけ

湖雲

南尾花のあこぼれを腐捕

珠丈

はややくれ薫るてかやす

松江

がねがやれかてかく木槿候

雜路

右どーとまゆの秋のむらか

少汝

猿歌集卷之四

冬之郭

うす水のさまるかとさくめやうす  
風ふのさ年ならりねいひー  
いへ人の云のそよがうれせよ  
月よ時うよ空よかうする空空を  
キヤうて立城櫓うやよおよ  
ひとやあすう右の山海一千余里  
をへうて今誰うかうと思ふよや

淋一きも大もよぢりぬ年のか  
木一かくへたう門の韻れ

雄渾

蓮れ

素やせの雨としきのまこと

櫻にいみのこくかうき日

やつらにかがむ春の月

よしりゆの車賣

旅人をまわせぬまく

整おううけをまきむす川

海あくまでかくも難よがれをあ

ほそくよ雪のまとれる

松松松松、松松松松

新法師のくも夢月時

寺の廊下のあ深きト

秋風、とも草人ぐ

ゑみの庵すあるのつま

引波せあまよみて打ひたす

大鳥柳くすくすあのみ

峰花のあゆよ代豆腐

せとくすくすあまよ雨

松松松松、松松松松

日酒の名あす事ふ時雨下  
ちくね木の名ふとワ、三月  
鱗のよけ油よつく板のかげ事  
同すしむちうり薦めうち  
まのよれすら買ひ入せん  
温石あする火のすすなる  
時も壁うへ一聲ハ

松葉、松葉、松葉

ふ剥搗の實を拾ふ時  
あ香てん油きを走れど  
園の庭松もす二日陣  
手をさすふ若松子を画づ  
せよもいをけの枝子  
けろり、鳥帽子の秋の日松を  
南向やへ立をさすすり  
油をすき、飴も蜜のすり

松葉、松葉、松葉

かづけ色の袖をすまし 安

余はうきよせつとお花

陽光と重とあり 杜麻

安

歌は雲をうきくは未だうす  
自花をよみをうきうれ

オの元をあふる春やうじふ

鬼子

大名すすりともうすこ一堵の堂

南山

つゆうさはよかまふを枯芒

近江

佐伝のよハすせん芒け

柏翠

ぬ雁のひもわまく峰雨

史方

あらわやねうづく無漏宇

扇風

轂とよとよとあさ日可取

成美

風の聲つづひあら我歌ひ

ル隱

山奈衣や横たまにまよは向日

太節

坂太や三の子やすすめの海の音

金成



川吉や根源むすよあつて

左深

東皋

芦や林火くさりた、さの田畠

莫尤

あ、秋あらたまち、游せ豆腐串

豆ね

通するるの寐入りのき

苦鈴

つやわれ、ゆきせせた、あら

木且

やの日とよせあひうど、のれ

麻枝 小音

れをきみ三日月をく、落から

木音 落客

海へとよれあら小春のとうづ

右川 吴雲

すまたの秋せすく、すかず

京

蒼虬

え、風のかすよ、駆とも柳

信

二枝

おもおとひや小手のたまえ

湛北

祇とり小拂へりと時ひそ

ミト

東後

木折の追舟の、夜舟

笠

二笠

あいのくと白子の柳

太

柳坡

常作れ墨縁けと精めら

皇

太名

きのくよしとくと、清音

朱谷

第二

アヤツリや枯れのる比雲 薩州

あきのすすめやあさやあさと 可之部

サシモキシカシ

増毛け刀さーともし持せり 三釈

もくすのせとせ山川の月

雪岸

温泉アラカヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

咲里

追手ては森のくときわら

調雅

アレセホ月の御みよ月の花

嵐景

草野やね玉四うきじの月 ミト長た

朝の朱せすすみ小春

暁山

アーテキや身出やまの車乃

士同

あすのすすめすすめすすめすすめ

柳は  
ウタ

アシモヒや周のもとと峰衡

笠白規

腕家かくすすとすの持葉と子 箕子

天有

アケル家よ大きよすすりやの空

甲斐

可教里

風一等  
百尋  
柳志  
琴  
琴  
馬  
九味  
江  
雨  
桂  
浦  
散得  
戶浦

風  
一等  
百尋  
柳志  
琴  
馬  
九味  
江  
雨  
桂  
浦  
散得  
戶浦

露カスくとくとくとくとくとくの爲カイ 朝アサヒ

時ハシマのりや纏マタニのふの筋スジ遠アリ

川カワ 栗樹リツシ

麦前シモクのせはせり今イマ月暮ツキノカヨ

春耕スプリング

而ハむすまきあひれやうへ雲クモ下シテ 膀ハラ

一イチ 柳カツラ

こそりそりそりやそりやそりの雨ウヂ北ヒタチ

東蘭ヒタチ

家始ハタハタす事ハタハタやまくの晴ハタハタあま

京カエダ 壱院イチエン

色ハタハタや色ハタハタをあふはよ一イチ ま

國南カエダ

菴ハタハタす森ハタハタ山ハタハタよ寒ハタハタの

房ハタハタ

波月や東柳ヒタチ秋聲ヒナギ抄ハタハタすハタハタ 太連  
さくわの秋ヒナギそくヒナギの原ハタハタ里堆ハタハタ 伯ハタハタ  
茅ハタハタの鳩ハタハタがれ葉ハタハタ吹賣ハタハタ 白阿ハタハタ  
さまハタハタよ深ハタハタのこだり雪ハタハタ人ハタハタ 伯ハタハタ  
月ハタハタかはり鶯ハタハタのゆまくねばれ 霧ハタハタ 壺月ハタハタ  
秋ハタハタよも霧ハタハタてへこか月ハタハタ 初鶯ハタハタ 雾ハタハタ 過ハタハタ  
ちハタハタ秋ハタハタのたまひ小ハタハタや小ハタハタの坂ハタハタ 肥ハタハタ 止梅ハタハタ  
天ハタハタ外ハタハタ

寧の後、著の事の事か立ササ 家居

木の葉、薄アシカヒ かくはる秋風 睡采

麦穗アキハラ かくはる秋風 吴风

穀コモリ かくはる秋風 萩東

山茶花サンザシ の香り かくはる秋風 鳥音

鶯ヨウジ かくはる秋風 八斗

小蘋花コブシ の香り かくはる秋風 雨聲

拂ハラフ かくはる秋風 かくはる秋風 潮

秋の外、夕か持ハサフ かくはる秋風 二德

志シテ かくはる秋風 かくはる秋風 雄森

冬の枝や拂ハラフ かくはる秋風 茶房

秋風カクハル かくはる秋風 かくはる秋風 菊使

とすかくはる秋風 かくはる秋風 布葉

蝶テフ の脚、葉か拂ハラフ かくはる秋風 宋郎

小蘋花コブシ かくはる秋風 基化

小蘋花コブシ かくはる秋風 舟江

取霍子魂今う教せ一も 士彦

毛のふゆともつて月のよき 西同

鶴芋の日ハ以て萬葉も此花 完車

絞少すと曉風やの前路より 浦人

木戸先や野の毛つまみれの新 芳舟

あゆほれねあわれなり嘆歌 雨考

ワシ岩ハ精小拂け伊勢の神 世作

タヒヤもふつうたるその入 百古

初登

短日やきらりつるひ赤椿 近江 鳥从

龍も苦戸さくらんや苦け 画中

あくらやえととよみゆゑづれ 九處 兩鶴

毛（ヨリ）の花、あきらかに 岩室 月草

大原や里をりくとくい人の家 亜圭

田とかくすを啼むり秋の聲 卓堂

空ハ里のあもしれを語ん松葉月 暮久安

ひうちの声をうその月夜ト 子孝

意堂、蕉翁の舌友たり一日風の  
をととのひ破きやすく、あらの筋、  
せかくを絶へて、せめ歌をす  
もとと甲子の竹と、神へて  
曰ひがたるゆひを、秋まえの  
花すゆくよ、おの杜みかづ  
さす、隱士の句すれ、ばかりの  
うやう、とあつたすれを  
そくとも向ふとく

月時

さくらとくは古き、りよ

士朗

あふと早めに埋め、かくまく

蓬松

姑射の蓬松を集て、あ小町  
宿題す、次へ著すの二之  
編のみままで、このは編せんじ、  
えどもすりおま秋と、しゆのせぢ  
もじゆすりやつて、お酒を、  
ざくちき、射のあしらひもまくら  
て、帰嵩の里せぬよ、かそこ  
ふくのそいはうとがくつうじ

まつうすゆふとあそりれよ  
ひきのくらふといふを集はる  
人のおもひあらむ

文比豈雨来

石津琴橋の旅食

唯潤化



仙臺国分町

加志和屋正六梓



